ひょうごJCC

兵庫県協同組合連絡協議会機関誌

72

2010. 3. 31

兵庫JCCは、生協、JA（農協）、JF（漁協）、森林組合等の兵庫県内の協同組合運動相互の連絡提携、共通課題の実行及び全国、海外の協同組合運動との連携をはかることを目的に、1984年7月7日に設立されました。「人とひとの心がふれあう、暮らしよい兵庫をめざしてー協同が息づくまちづくりー」を『基本理念』として、協同組合の「共通行動目標」の実践に取り組んでいます。

Contents

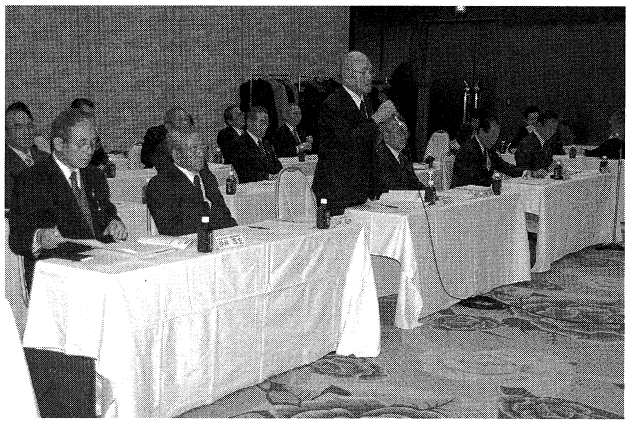
1. 協同組合活動スナップ …… 1
2. 2009年度協同組合研究・交流会を開催 …… 2～4
3. 今協同組合ではー各協同組合からの報告ー
- ●生協 …… 5
- ●ＪＡ …… 6
- ●ＪＦ …… 7
- ●森林組合 …… 8

4. 賀川豊彦献身100年記念事業の取り組み …… 9
5. 進めよう！協同組合間協同の取り組み …… 10
6. 協同組合運動に生きる …… 11
兵庫県生活協同組合連合会専務理事　大西 憲慈
7. 協同組合短信〈No.55〉 …… 12
滋賀県立大学教授　増田 佳昭

協同組合活動スナップ

△ 生協

兵庫県民会館で1月9日、今回で5回目となる「新春トップセミナー」「賀詞交換会」を開催しました。当日は、兵庫県から井戸敏三知事をはじめ７名の方々をお迎えし、会員生協の理事長を含む理事・監事・共栄火災海上保険株式会社、のべ70名の参加をいただき、新年の決意を新たにする機会となりました。



△ JA（農協）

2月6日、神戸市のラッセホールで民主党県連とＪＡグループの政策懇談会が開催され、兵庫県農政推進協議会（会長：石田正）からＪＡ組合長など28名が出席し、農政についての意見交換をしました。

△ JF（漁協）

「親子で乾しのり作りと飾り巻き寿司に挑戦！」と題して海苔イベントを2月28日に行いました。明石市を中心に親子20組が集まり、みんなで「のりすき」と「お花の飾り巻きずし」に挑戦！どのように海苔ができるのか体験しました。

△ 森林組合

1月22日、23日大阪市にて森林の仕事ガイダンスを開催

●編集発行

兵庫県協同組合連絡協議会（兵庫ＪＣＣ）
Hyogo-ken Joint Committee of Co-operatives
生協・ＪＡ（農協）・ＪＦ（漁協）・森林組合

●兵庫JCC事務局

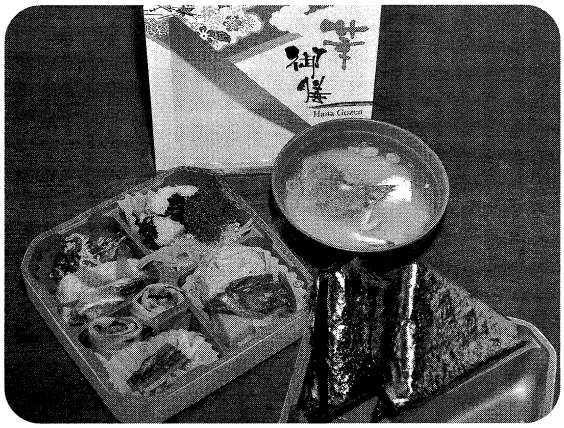
兵庫県生活協同組合連合会　TEL (078)391－8634
兵庫県農業協同組合中央会　TEL (078)333－5870
兵庫県漁業協同組合連合会　TEL (078)652－3444
兵庫県森林組合連合会　TEL (078)341－5082

2009年度 協同組合研究・交流会を開催

兵庫県内の協同組合４団体で組織する兵庫ＪＣＣ（兵庫県協同組合連絡協議会）は２月16日、コープこうべ協同学苑（三木市）で「2009年度協同組合研究・交流会」を開催しました。今年度は前年度に続き「地産地消で私たしのくらし方を見なおそうⅡ」をテーマに、生産者と消費者が本音で語り合い、日々の生産活動や消費活動を地産地消の視点で見直すきっかけの場となりました。生協・ＪＡ・ＪＦ・森林組合の役職員、生産者および兵庫県行政、農林水産省近畿農政局から160人が参加しました。

兵庫大学の池本廣希教授が「あらためて今、なぜ、地産地消なのか」と題して基調講演を行い、地産地消において協同組合運動、協同組合間協同の必要性を述べました（講演録を４ページに抜粋）。また、農業・漁業・林業の生産活動の現場、消費活動の現場、行政の取り組みの報告を元にパネルディスカッションが行われました。

昼食は地元食材をふんだんに使った「地産地消弁当」・「漁師汁（ワタリガニ）」が提供され、交流会を盛り上げました。「地産地消弁当」は、コープこうべ家庭料理研究会が作成したレシピを基に、生活協同組合、JAグループ兵庫、JF兵庫魚連が地元の食材を提供し、これをコープこうべの関連会社（株）コープフーズが２段重ねの弁当に調理しました。「漁師汁（ワタリガニ）」は、JF兵庫漁連が販売しているワタリガニとアメリケーヌソースに白みそを加えて作成しました。



地産地消弁当

[ご飯物]　おむすび　たこめし
おむすび　ちりめんの佃煮
[焼き物]　鯛のユズ香焼き
[煮　物]　ひろうすと根菜の白みそ煮
[付け合わせ]　サトイモののり和え（ブロッコリー添え）
ぐるぐるキャベツ
ホウレンソウ入り玉子焼き
ちりめんとネギのゴマ油炒め
ニンジンのジャムサラダ
酢の物

◆ＪＦ兵庫漁連提供

明石・播磨灘産　たこ
明石産　鯛
瀬戸内海産 ちりめん　焼き海苔

◆ＪＡグループ兵庫提供

加古郡稲美町産
ユズ　ダイコン　ニンジン
小松菜　サトイモ
ブロッコリー　キャベツ
ホウレンソウ　ネギ

◆生協提供

特別栽培大豆使用白みそ
ふっくらひろうす
切れ目入りこんにゃく
イチゴジャム

◆その他

兵庫県産コシヒカリ
瀬戸内海産穴子

漁師汁（ワタリガニ）

坊瀬産ワタリガニとアメリケーヌソースのセットに白みそを入れて調理　http://www.seat-sakana.net/で入手可

参加者からのひと言

○「地産地消の大切さを実感しました。学校給食への配慮は重要です。子供の成長、食育の観点からも大いに地域の恵みを与えてほしい。未来を担う子供たちの成長を第一に考えて制度の難しさを乗り越えて、地産地消を生かしてほしいと思います」

○「実際に農業体験など、農産物ができる家庭を実体験することで、生産者、消費者の思いが少しでも伝わるようにすることが大切だと感じました」

○「地産地消弁当のアイデアは非常に素晴らしいと思います。これをぜひとも商品化していただくようお願いします」

○「池本先生のお話は大へんわかりやすく、農・林・漁業がいっしょになってくらしをささえていることがよく理解できました。生産者との交流を深め、地元の産物をできるだけ活用していきたいと思います」

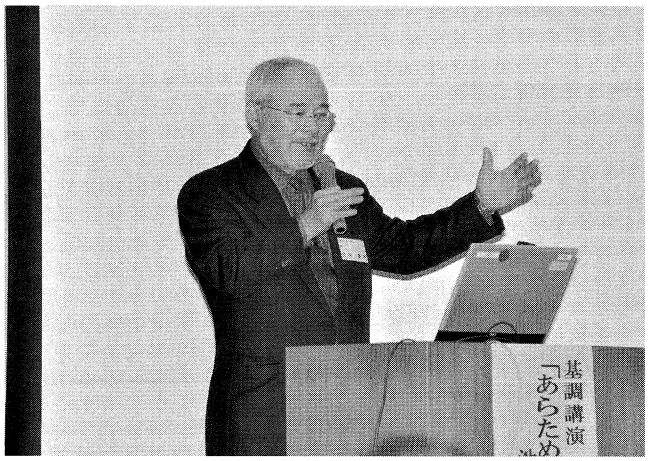
○「なかなか国内自給率は上がらず危機感を感じています。いろいろな団体が地産地消が大事だと考え、自給率向上に向けて努力されているのがよく分かりました。個々に努力するだけでなく、つながりを持ってやっていかなければならないと思いました」

○「もう少し意見や交流をする時間の余裕が欲しかったです」

記念大会講演

「あらためて今、なぜ、地産地消なのか」

兵庫大学経済情報学部　教授　池本廣希



1．すすむ少子高齢化と人口減少

わが国の人口は、2004年（平成16年）をピークに減少しはじめ今世紀末までには、半減すると言われています。このことは、今後一人っ子が増えていくことを意味します。最近、若者たちの行動で社会的帰属意識を持たず、引き籠る子が増えているように思われます。それだけに、これからは『共に支え合って生きる』姿勢が、つまり『協同』の姿勢が大切になってくるのではないでしょうか。私たちは友人や先輩・後輩の間で成長してきましたが、そこで培った仲間づくりや協同の精神を次世代へつないでいく必要があると思います。兵庫県はため池が多いのですが、ため池には、鳥や魚やトンボなど様々な生き物が集まってきます。水があるところには生き物が集まり、そこは生き物が共に生き、共に支え合う生命系の世界が広がり、それを協同の世界が支えています。資本主義経済や社会主義経済がある意味で破綻している今日、「協同の社会」が求められています。

2．地産地消と生命の連環

土は食べ物をはぐくみます。食べ物は食卓に届き、人間へ栄養を運びます。人間の出す排泄物は土に返り、肥やしとして土に栄養を与えます。これはわが国の伝統農法でした。この連環は暮らしの中でも実践し、深めていく必要があります。地産地消は、この生命の連環を顔の見える関係の中で、実践することができるのです。この連環は身土不二の考え方にも通じるものです。しかしわが国は、1960年代の高度経済成長期に工業に力を注ぎ、土離れが進行しました。その結果が、農業の高齢化や耕作放棄地、限界集落の急増にはねかえりました。食糧生産を担う農業が、すなわち生命の再生産基盤が危うくなっている今日、これを打開するためにも地産地消を大切にし、地域社会の再生・自立に向けた「協同の精神」がここでも叫ばれます。

3．土離れ・縁離れのツケとその行き先

わが国の穀物自給率は、1960年に82％でしたが、高度経済成長と裏腹にどんどん下がり、25年後の1985年には32％まで下がってしまいました。“食糧の安全保障”が気になるところです。昭和20年代後半、当時アメリカでは食糧が余っており、これを食糧難で困っている日本の子どもたちにパンと粉ミルク給食で支えようということから学校給食が始まりました。こうして、パン食と牛乳が浸透していったのですが、これは高度経済成長政策（工業製品輸出の見返りに農産物の大量輸入）の下支えになりました。つまり、当時の学校給食は輸入農産物の受け皿になったのです。このことが、わが国の食の洋風化や食料自給率低下の原因になったことを忘れてはならないでしょう。また、ご飯が減りパン食が増えるにつれ、おかずの品目も減り、子どもたちが野菜を食べる量も減ってきました。その結果、偏食と野菜嫌いが増え、小児成人病や高脂血症の子どもが増えていることはとても気になるところです。

4．地産地消で暮らしがどう変わるのか

地産地消は、地域を食べ、地域と食の伝承を支え、いのちの輪となる『縁』をつくり、時空を超えた共感と協同の世界を広げます。また、子どもたちが、田植えや稲刈りを体験し同時に、地産地消給食を実践していくことは極めて重要です。生命のスタートは排泄物を食べる土にあると言われます。「土から得たものを土に返せ」という教えに学びましょう。市場原理の弊害は、生活の維持・実現の手段としてある貨幣の獲得が自己目的化するところから生じます。私たちの暮らしは、市場経済に活用されるのでなく、市場経済を活用するというスタンスが大切です。そのためにも、非循環型の市場原理から循環型の環境原理へ切り替えていく必要があるでしょう。最後に、米は収穫能力が高い作物で、零細経営でも十分に作ることができます。これからもアジアの人口は増えていきますが、収穫能力の高い米を農業のベースにするという考えが成り立ちます。温暖化対策にもなる水田稲作は、飢えと地球を救うことができるのです。

今 協同組合では ―各協同組合からの報告

生協から

「2009年度 兵庫県生協大会」を開催しました。

毎年10月は生協法施行記念の月として、会員生協では生協普及強化の取組みが行われます。兵庫県生活協同組合連合会では、日頃の生協活動をお互いにたたえ、生協をアピールする場として、1968年より「生協大会」を毎年開催しています。

2009年度は、10月7日（水）に兵庫県民会館にて278名の参加のもと「協同が息づく兵庫のまちづくりをテーマに開催しました。

第一部・記念式典は、まず主催者を代表して兵庫県生協連・浅田克己会長理事が挨拶し、続いて兵庫県副知事・吉本知之様、兵庫県議会議長・原吉三様よりご祝辞をいただきました。その後、永年生協の発展に寄与した５名の役員に生協功労者表彰として「兵庫県知事感謝」が吉本副知事より贈られました。また、生協業務に精励した28名の役職員に浅田会長理事より「兵庫県生活協同組合連合会長表彰」が贈られました。

第二部のスタートは、アトラクションとして、コープこうべ組合員コーラスサークル「アミーガ」のみなさんにより、「もみじ」「オー・シャンゼリゼ」などの名曲を歌っていただきました。続いての記念講演は、甲南大学スポーツ・健康科学研究センター准教授伊東浩司氏より「陸上競技（スポーツ）を通じて学んだこと」と題して講演をいただきました。また、今年も地域生協・大学生協・医療生協・共済生協など分野ごとにパネル展示などで活動紹介する、生協紹介コーナーを設け、参加者に生協活動をＰＲしました。

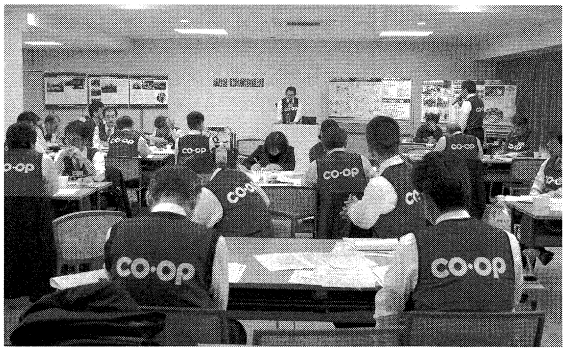
「兵協連第２回大規模災害対策図上演習」を実施しました。

兵庫県と兵協連は、2008年1月12日に「緊急時における応急生活物資等に関する協定書」および2009年６月23日に「実施細目」を締結しました。いざと、いう時に兵庫県と締結した「協定」および「細目」の内容に従って兵庫県からの支援要請に対してすみやかに支援ができるように、また被災した会員生協への支援および安否確認ができるよう、以下の内容で図上演習を３月３日に10会員生協29名（日生協、兵庫県含む）の参加で実施しました。

（図上演習とは） 時間の経過とともに変化する災害発生後の状況を想定したシナリオを付与し、参加者はグループ単位で状況に応じた情報の収集・処理（とりまとめ、分析、意思決定等）・伝達等の対応を机上で行う演習

（今回の演習のねらい）

①各生協における被害想定と災害対応上の課題の抽出
②兵庫県と協定している応急生活物資供給に関する手続き、活動内容の確認
③兵庫県と協定している医療・保健活動への支援に関する手続き、活動内容の確認
④会員生協の業務再開支援に関する取り組み
⑤被災地支援（ボランティア含む）に関する取り組み
⑥単協と県連との連携の検証



JA(農協)から

迫られる、農業の担い手確保対策

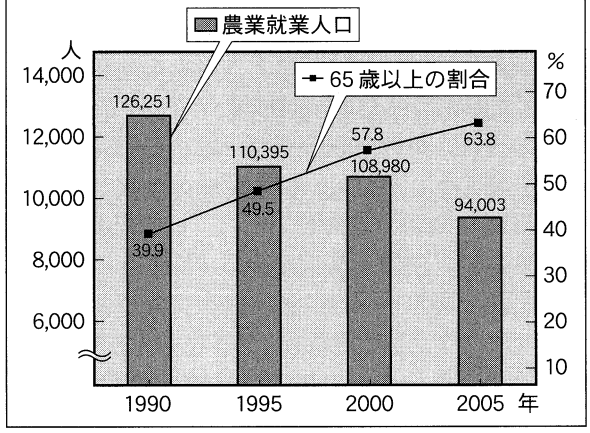
1. 農業の担い手の現状

農業従事者は、ここ数年で急激に減少してしまう恐れがあります。本県農業は、中山間地と呼ばれる傾斜の厳しい地域が耕地の多くを占めるため規模拡大が進まず、農業だけで生計を立てられないので兼業機会を求めた多くの中小規模農家が主体となって、地域農業を支え環境も保全してきました。

このような中で、農業従事者の減少や高齢化の進展は著しく、65歳以上の農業従事者が全体の3分の2を占めるまでになっています。これまで本県農業を支えてきたのは、昭和一桁世代ですが、いよいよこの世代に頼ることができなくなり、農業では所得の確保が難しい中で、次世代への継承が困難になっています。

今のような状況が続くのなら、5～10年以内に農業から撤退する人が続出し、雪崩を起こすように地域農業が崩壊しかねない、今はそんな瀬戸際の時です。

図 兵庫県の農業就業人口と65歳以上の割合の推移



2. 本県JAグループの取り組み

本県JAグループでは、このように厳しい将来展望の中で、行政とも連携しつつ次のような地域にあった多様な担い手づくりの取り組みを進めています。

①担い手に出向く担当者TAC（タック）を明確にし、情報を提供するとともに、担い手のニーズに対応する活動を行っています。

②定年帰農者や女性・高齢農業者等に対しては、農産物直売所など少量でも直接販売できる場を提供しています。

③集落内の農家が話し合い、計画的な土地利用や農機具などのコストの低減を図る集落営農組織を積極的に育成しています。（平成21年3月現在：910組織）

④担い手が地域にいない場合の受け皿として、ＪＡ出資農業法人の設立を進めており、現在7JAで8組織が農作業や農業経営の受託、新規就農者の研修の場の提供などに取り組んでいますが、どの法人も厳しい経営です。

⑤22年度より「もうかる営農プラン」という取り組みモデルを提案して、少しでも個々農家の農業所得の向上が図れるよう、生産技術指導や農産物販売対策などを重点支援していきます。

3. 後がない、本県農業の担い手づくり

JAグループでは、上記のような担い手対策に取り組んでいるますが、いずれも輸入農産物の影響や消費減などによる農産物価格の低迷と、燃油・肥料・飼料など生産資材価格の上昇により経営は厳しく、光は見いだせていません。今後、将来に希望を持てる農業施策の実現と併せ、担い手対策を急がなければなりません。今こそ協同組合の仲間の皆さまには、本県農業の応援団になっていただきたきたいと思います。

JF(漁協)から

～命を守る運動～　海上安全講習会を開催！

水産庁によると、全国の漁船の海難事故や海中転落による死者・行方不明者は、平成15年から19年の平均で毎年約150名発生しており、また全船舶の約6割を漁船が占めています。

兵庫県下でも、荒天による転覆や船舶火災も含め、毎年のように事故が発生しています。そこで少しでも事故防止を図るため、JF兵庫漁連、兵庫県内海漁船保険組合、共水連兵庫県事務所、(財)ひょうご豊かな海づくり協会、(財)兵庫県水産振興基金の5団体は、第5管区海上保安本部、神戸運輸監理部、関西小型船安全協会と協力して、漁業者のみならずプレジャーボート所有者も対象に各地で「海上安全講習会」を開催することとしました。

講習会では最近播磨灘で起きた事故例をプロジェクターを用いて紹介し、防止対策や初期対応、ライフジャケット着用の義務など、危機防災意識の啓発に重点をおいた内容となり、参加者は終始真剣に聴講していました。

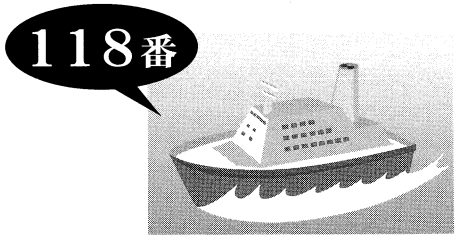
この講習会を「命を守る運動」として位置づけ、各JFに通常総会などの組合員が集まる機会での開催を呼び掛けています。

海の「もしも」は118番

海上保安庁は、海上における事件・事故の**緊急通報用**電話番号として、警察の110番や消防の119番のように覚えやすい局番なし3桁電話番号「**118番**」の運用を2000年5月1日から開始しています。

次のような場合に通報してください。

○海難人身事故に遭遇した、または目撃した。
○油の排出等を発見した。
○不審船を発見した。
○密航・密輸事犯等の情報を得た。



森林組合から

森林組合職員参加による講演会を開催

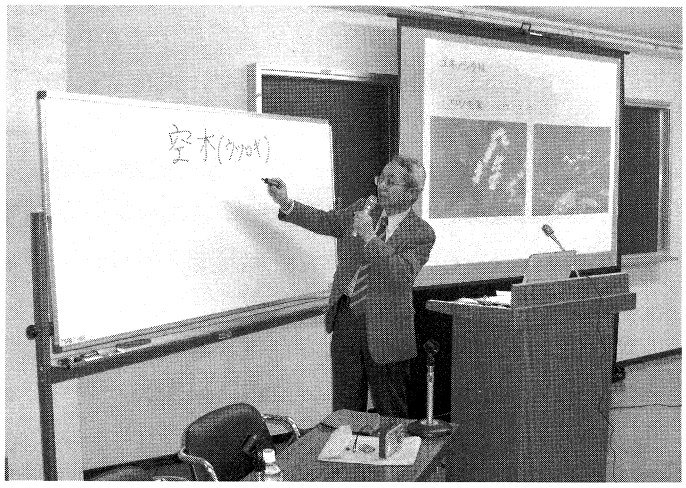
平成21年12月に森林組合の職員で組織する「兵庫県森興会」の総会が開催され、多数の参加者の出席を得ました。

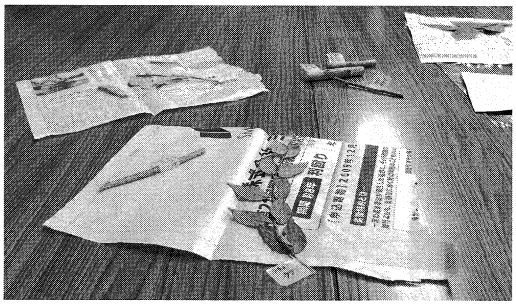
また、総会に併せて「樹木と人々の生活」～ウツギの事例から～と題した講演会が開催されました。

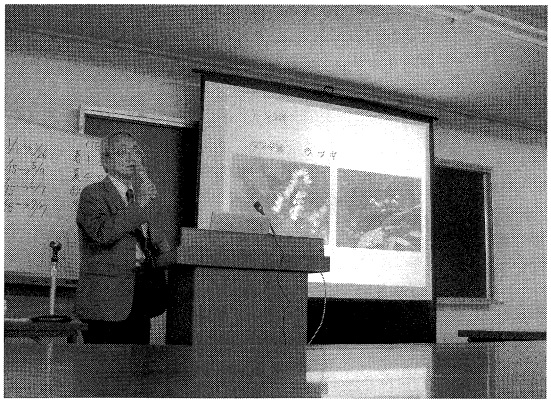
講師には、環境カウンセラーの田中 明氏（兵庫県木材協同組合連合会専務理事）を招き、ウツギと人々との係わりについて講演いただきました。

また、写真や実物も持参され、出席者も興味深く聞き入り、今後の業務にも役立つものとなりました。

※ウツギ（空木）とは、ユキノシタ科の落葉低木で5～6月に白い花を咲かせ観賞用として庭木や生け垣に使われます。







森林組合では系統IC活動として、愛称を「JForest」（ジェイフォレスト）とし、次のロゴマークを使用しています。

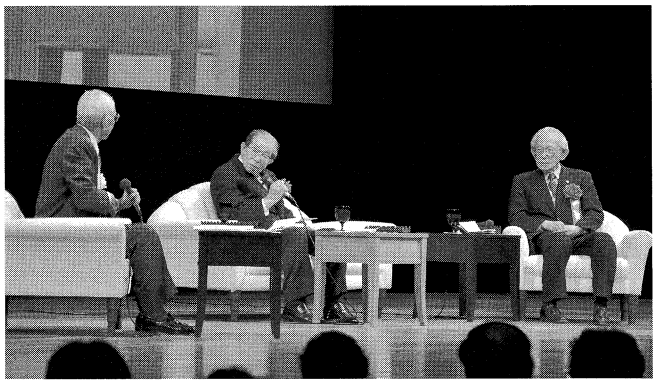
JForest

賀川豊彦
献身100年記念事業の取り組み

協同組合運動、農民運動、労働運動、平和運動などに大きく貢献した賀川豊彦の精神を受け継ごうと、平成21年12月22日、神戸市のポートピアホテルで記念式典が開催され、協同組合関係者ら1600名が参加しました。協同組合関係者等でつくる賀川豊彦献身100年記念事業神戸プロジェクト実行委員会（今井鎮雄委員長）が、賀川が神戸のスラム街・新川に身を捧げた1909年12月24日のクリスマスイブから100年経過するのを記念して開催したものです。

式典では、聖路加病院名誉院長の日野原重明氏より、「賀川豊彦献身100年を機に、いま私たちにできること」と題して記念講演がありました。氏は「賀川は、生協運動・農民運動・労働運動・平和運動など様々な運動を通し、常に弱い人の立場に立って行動する勇気の人であった。現在の私たちが、これを受け今後の100年をどう行動するかが問われている」と述べられました。次に、「賀川豊彦の何を継承し発展させるか」をテーマに、日野原氏、今井氏、そして神戸大学名誉教授の野尻武敏氏による鼎談が和やかに行われ、最後に今井委員長が「賀川が蒔いた種によって生まれた様々な団体が今回の記念事業を契機に集まったが、賀川と同じ思いで一致して行動すれば、大きく社会を変えることが出来る」と締めくくりました。

この後、地域のボランティア活動等で賀川の思いを実践している7団体8個人に対し、記念事業の一環で設置された第1回賀川賞が授与されました。



神戸プロジェクトの記念事業としては、今回の記念式典を始め、今後100年間毎年実施をめざす「100年シンポジウム事業」や、広く賀川の取り組みを伝える「出版発信事業」、人間のしあわせを研究しプログラム開発する「研究開発事業」、賀川ゆかりの場所をまちの中に落とし込み新たなまちづりに生かす「まちマップ事業」、賀川の活動を伝え研究する「賀川記念館事業」などを順次進めています。既に賀川記念館は12月12日に献館（竣工）し、記念館の中にミュージアム、アーカイブス等の施設が開設（4月17日オープン）される予定です。

＜最近の賀川豊彦関係出版物＞

書　名	著　者	出版社	価 格
友愛の政治経済学	賀川豊彦・著、野尻武敏・監修、加山久夫・石部公男・訳	日本生活協同組合連合会	1890円
賀川豊彦とボランティア　新版	武内勝・著、村山盛嗣・編	神戸新聞総合出版センター	1890円
劇画　死線を越えて	藤生ゴオ・画、大崎悌造・著	家の光協会	1200円
死線を越えて　復刻版	賀川豊彦・著	ＰＨＰ研究所	1575円
空中制服　復刻版	賀川豊彦・著	不二出版	1800円
一粒の麦　新版	賀川豊彦・著	今吹出版	1680円
乳と蜜の流るゝ郷　復刻版	賀川豊彦・著	家の光協会	1995円
賀川豊彦	K. H. シェル・著、後藤哲夫・訳	教文館	2730円

進めよう！
協同組合間協同の取り組み

JAと生協の連携
「協同学苑内のJA兵庫教育センター」

三木市志染町にあるコープこうべ「協同学苑」は、平成3年にコープこうべの創立70周年記念事業の一環として、豊かな自然の中で「愛と協同」の理念を継承し広めようと開設されました。その3万坪の広大な施設内に、県内JAの役職員教育を行う「JA兵庫教育センター」があることを知っている人は少ないのではないでしょうか。全国的にも例のない生協とJAの連携施設です。

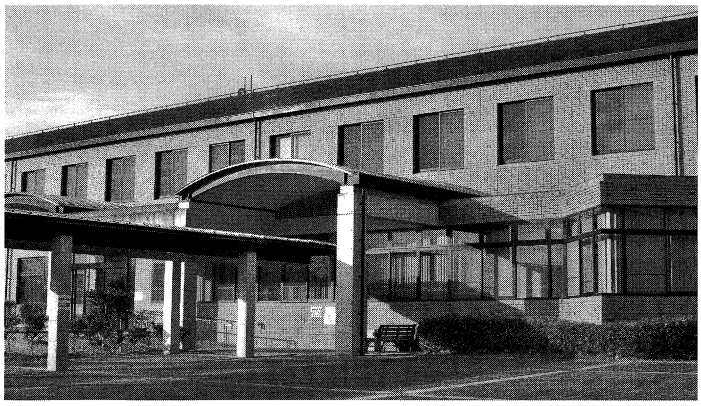
この施設が誕生したいきさつは、JA兵庫中央会は、明石市魚住にJA職員を教育する研修所を設けていましたが、施設が老朽化する中で、新たな教育センター設置の候補地探しを進めていました。丁度その時、協同学苑内で建設を予定していた施設（現在の協同棟）の中に、JA側が希望する仕様で施設を作ってはどうかとの案が出され、両者協議の結果、最終的にその施設をJA兵庫中央会が長期契約で賃借することで話がまとまりました。日頃兵庫JCCの活動などを通じて、親しい関係が出来ていたたまものです。

JA兵庫教育センターは、平成10年3月に完成し、以後は協同組合精神を基本としたJAグループ職員を育成・教育する拠点となっています。そして、昼食は、コープの方と一緒にレストランを利用したり、研修ホール・介護研修施設・宿泊棟など多様な施設が整っているため、多いに活用させていただいています。

また、JAの幹部研修会で野尻武敏学苑長に講演いただいたり、学苑入口近くにある、消費協同組合の歴史やコープこうべの生みの親である賀川豊彦関係の資料を展示している史料館は、貴重な協同組合教育の教材として、JAの新入職員研修などでは必ず見学させていただいています。

今後、協同組合運動を推進する役職員などの人材育成に向け、さらなる連携が期待されています。

（文：ＪＡ兵庫中央会）



生協と森林組合の連携
「社家郷山での森づくり」

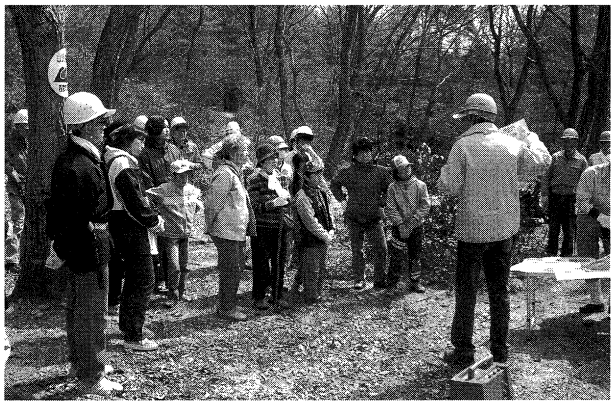
森を整備することは、温暖化効果ガス（CO2）の吸収を促進するだけでなく、生き物の多様性を確保し、ひいては食や資源を豊かに保つことにつながります。将来にわたって多様な生き物がすめる豊かな森づくりを目指すのが、コープの森・社家郷山の活動です。生活協同組合コープこうべは、マイバッグ運動を進める中で、集まったレジ袋代金については環境の取り組みに活用していますが、その一部を使用して西宮市の社家郷山（しゃけごうやま）の森林整備活動を開始しています。

この活動は、環境保全など社会貢献活動に関心の高い企業の森林づくりへの参加を支援する「企業の森づくり制度」の兵庫県の第1号として、平成20年に兵庫県、西宮市、コーディネーターである（社）兵庫県緑化推進協会との四者で森づくり協定を結んで始まりました。

社家郷山の整備に当たっては、兵庫県森林組合連合会や地域のNPO、組合員、コープこうべ職員がそれぞれの役割をもって集まり、どんな森林にしていくことが環境保全につながるのかということを話し合い、今の問題を調査し10年後にどうあるべきかということを考えながら進めています。目的は木の伐採ではなく、豊かな森づくりであることを理解して参加していただけるよう、いろいろなイベントやボランティアの育成研修なども行っています。楽しく自然と触れ合い、学習して発見し、結果、環境保全活動にかかわっていくことのできる取り組みです。ぜひ皆さんも一度見に来てください。

問い合わせ　生活協同組合コープこうべ環境推進室
☎078-856-2068

（文：コープこうべ）



協同組合運動に生きる

「いまあらためて、協同ということを思う・・・理念を深く考え、そしてシンプルに伝えたい」

兵庫県生活協同組合連合会　専務理事　大西 憲慈

兵庫県生活協同組合連合会は、1950年12月に設立登記をしてから、今年で60周年を迎えます。第二次世界大戦後の混乱の時代を乗り越え、はたまた災害を乗り越えての、組合員、役職員、諸先達の言い尽くせないご尽力の歴史であったと思います。

それは、消費者生協だけのことではなく、今日ＪＣＣに集ういろいろな協同組織の仲間も共通のことであったと思います。そしてこうした困難を克服していこうとしている時期は葛藤も多いですが、一方では目的と理念を共有して組織作り、運営強化等が進められたことと思います。

さてそれでは、これからはどうでしょうか。昨今の、日本社会の経済、くらし、そして事業環境各々の厳しさは言うまでもありませんが、協同組織は踏ん張って、その価値を実践に移していかなければなりません。では何から手を付けていけばいいのでしょうか。

私は、これからの協同組合を考えたとき、「協同組合らしい生産性の向上」といったことが課題だと考えています。

ただ、「協同組合らしい」ということを一つの協同組合の中で考え続けてもなかなか見えにくいものなのではないでしょうか。同質のものの中で、自らの特徴点を把握するのは至難の業です。

たとえば、あなたにとっての「生協らしい」と言うのはどんなことですか、言葉で何を思いますか、と他府県のいろいろな生協に関与している人たちに、かつて何年間かにわたって尋ねてみたことがありますが、それぞれの人が思っている生協らしさが語られました。

無論それでも、いくつかの共通したキィーワードは得られます。堅い、まじめ、善良、安全、安心、組合員、平和・・・など、いろいろで興味深いものでした。

特に、組合員の存在は、「生協らしい」事の最たるものでしょうが、むしろ、私企業と特徴点を比較検討する中で、より鮮明に見えてくるものがあります。思考の仕方として、歴史的経過を踏まえつつ、私企業との相対評価をしていくことも必要だと思いました。

先人の言葉を借りるならば、生協は「助け合いの組織」です。また、協同組合がたとえば流通業を営んでいる、と考えれば、対応しやすい事柄も多々あります。

協同組合としての、「助け合いの組織」としての本質をしっかりふまえることが肝要だと考えています。

また私の昔話ですが、ある流通業の経営トップの方から、「生協さんは、流通業の良心ですよ」と言っていただいたことがありました。今頃そのありがたみがわかってきているところです。

また、一方こうも言われました。「生協さんが常々言っている、他者への配慮というのは、すごいことですよ。なんといっても、この大変な世の中で、他人への心配や、気遣いをしていこう、また目指すということはなかなかできることではない、崇高な高いレベルの考え方ですよ」とも言われました。

いずれも、同じ方からのお話ですが、いわゆる「生協規制」の風あたりが強かった時代だけに、励まされもし、いろいろと考えさせられたことしきりでした。

私は、いまだに自分自身がその教えを十分生かしきれないままに、今日に至っている気がしてなりません。

協同組合が果たすべき役割を、深く考え、シンプルに次代の人たちへ伝えていければと思います。人それぞれに、いくつになっても、心に残る言葉というものはあるように思います。こうした中で、協同組合のアイデンティティもより醸造されていくことでしょう。

さらに、協同組合間協同は、互いの立場の相違を、顔の見える距離で知り合っていく地道な活動から、育てていくものだと思います。いわゆる顔を合わせ、心を合わせ、力を合わせ、ということであろうと思います。

ともあれ、このたびは思うところを述べさせていただく機会を与えられ、感謝いたします。

協同組合研究短信＜No.55＞

飼料用米と輸入トウモロコシ

増田 佳昭（滋賀県立大学環境科学部教授）

先日、農林水産省は2020年度の食料自給率を50％に引き上げるとの目標を正式発表した。その中で、飼料用米は08年度の1万トンから70万トンに増やすという。食料自給率低下の一つの要因は飼料の輸入依存だから、飼料用米で自給率が上がり耕地の利用率も上がれば一石二鳥だ。大変意欲的な目標で、今後の具体的なとりくみに期待したいと思う。

ただ問題はコストである。最近では飼料用米に手厚い助成が行われるようになって増産を後押ししているが、主食用米の場合の小売価格キロ400円（精米）、農家手取り価格キロ200円（玄米）に対して、飼料用米の販売価格キロ30円（籾米）という落差をどう埋められるか、単位面積当たりの増収もさることながら、政策的な助成なしで成り立たないことは明らかである。

さて今回は、飼料用輸入トウモロコシの流通と価格についてみてみたいと思う。飼料用米は、トウモロコシの代わりに使われるので、いわば競争関係にある作物だからである。

トウモロコシは日本人にもなじみの深い食べ物だが、主な用途は飼料用である。たとえば鶏用の配合飼料の約６割がトウモロコシである。その他の原料として大豆かすや魚粉、米ぬかなどが使われる。わが国のトウモロコシ輸入量はおよそ1,600万トン。コメの国内生産量がおよそ880万トンだから、２倍近い量が輸入されていることになる。これが穀物自給率30％を切る大きな要因となっている。

全世界でみると、トウモロコシの生産量は７億トン余り（2008/2009穀物年度、米国農務省調べ、以下同じ）である。アメリカが最大の生産国でおよそ４割を占める。ブッシュ大統領の時代に、バイオエタノール生産の振興が打ち出され、アメリカのトウモロコシ業界はかつてない活況をみせた。輸出は約9,000万トンだが、アメリカのシェアは６割以上、国際貿易での地位の高さが目立つ。では輸入量が多い国はどこかというと、なんと日本が第１位、世界の輸入量の17％を占めている。

さて、飼料用トウモロコシはどのようにして輸入されるのだろうか。その流通と価格の形成をみてみたい。輸入トウモロコシ相場は大きく動く、３月初旬現在、東京穀物取引所の輸入トウモロコシ価格（埠頭倉庫渡し価格）は２万円強で動いている。キロ当たりにすると20円程度である。これに配合飼料にする際の加工賃、国内運賃などが加算されて、畜産農家の購入価格が決まることになる。

それでは、トウモロコシの物流を追いながら、価格形成をみてみよう。アメリカのトウモロコシは、シカゴの南方にミシシッピ川に沿って広がる中西部の「コーンベルト」といわれる穀倉地帯で生産される。古くから穀物取引の中心地であったシカゴには商品取引所があり、トウモロコシ相場はそこで決まる。

トウモロコシの産地相場であるシカゴ相場は、現在、１ブッシェル当たり3.6ドル前後である。1ブッシェルは約25.4キロだから、トン当たりにすると約142ドル、１ドル90円として12,750円/トンとなる。トウモロコシ生産者の手取りはおそらくトン当たり12,000円弱であろう。アイオワ州の最近の単収はヘクタール当たり12.5トン程度（10アール当たり1.25トン）のようだから、1ヘクタールの売上は15万円、100ヘクタールを作付けしても粗収益は1,500万円に過ぎない。確かに低コスト生産だが、アメリカの農家もなかなか厳しい状況である。

輸送にはいまだにミシシッピ川の水運が使われている。トウモロコシは何艘もが連なったはしけに載せられ、ニューオーリンズなどメキシコ湾に面した輸出港で大型船に船積みされる。船積み価格をFOB価格と呼ぶが、本年２月のFOB価格は約162ドル/トン、日本円で14,580円/トンである。

船積みされたトウモロコシはパナマ運河を通って太平洋を横断、日本に届くわけである。この間の海上運賃は、トン当たり約70ドル、およそ6,300円となる。FOB価格にこれを足すと20,880円/トン、きっちりと、上述の埠頭渡し輸入トウモロコシ価格となる。

アメリカのコーンベルト地帯から日本までおよそ17,000㎞。地球半周にも近い、はるかなるトウモロコシの旅である。それに加えてトウモロコシ価格は大幅に変動し、高騰時には現在の3倍近くであった。私たちの食は、遠くの不安定なものに依存しており、意外に危いものなのである。

今後、世界的に食料は逼迫傾向がすすむと予想されているが、それでもトウモロコシの国際相場と飼料用米との間には相当の開きがある。また、飼料用米をうまく畜産農家につなげるためには、安定した流通の仕組み作りが不可欠である。そのために、各地で飼料用米について生協と農協などによる協同組合間連携の取り組みが行われているのである。政策による支援とともに生産者、消費者の主体的な取り組みが期待されているところである。

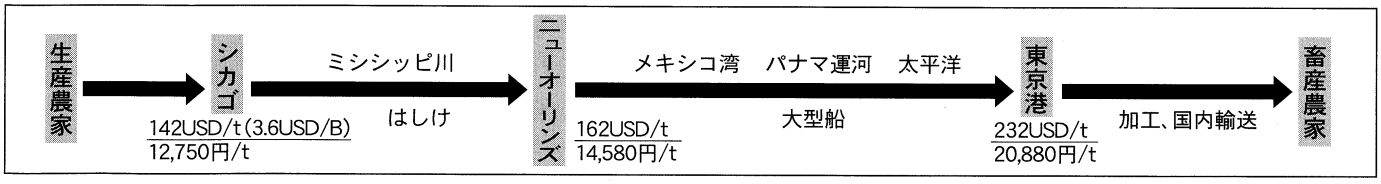



図　飼料用トウモロコシの流通と価格